

令和6年度全国学力・学習状況調査 鹿児島県 結果分析(概要)

総括

- ・学力調査について、小学校においては全国平均正答数とほぼ同等で、中学校においては全国平均正答数をやや下回った。小・中学校ともに無解答率が全国よりも低かった。
- ・学習状況調査について、自己肯定感に関する項目や主体的な学びに関する項目、自己調整力に関する項目などの「非認知能力」については、全国平均を下回った。
- ・分析の結果、自己肯定感や自己調整力、個別最適な学びの間の相関や、自己肯定感や個別最適な学び等の学び方、ICTの活用頻度と正答率との間の関係があることが明らかになった。

「非認知能力」に着目した分析・考察

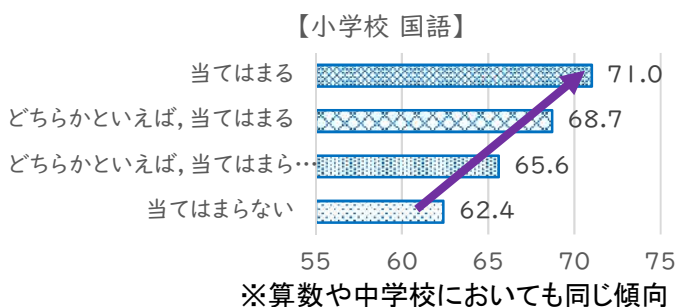
分析

- ・自己肯定感や自己調整力などの「非認知能力」に関する質問に、肯定的に回答している児童生徒は学力調査における正答率が高い傾向にある。(グラフⅠ)
- ・「②先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と、「①自分にはよいところがあると思う」や「③困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」には、正の相関が見られる。(表Ⅰ)
- ・「⑤分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる」や「⑪授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思う」の自己調整力と「⑫国語の授業の内容はよく分かる」、「⑬算数(数学)の授業の内容はよく分かる」には、弱い正の相関が見られる。(表Ⅱ)

考察

- ・教師が児童生徒のよさを認めたり、活動や取組を価値付けたりするとともに、先生や学校にいる大人に相談しやすい関係づくり、仕組みづくりに努めることが求められる。
- ・自己調整力を発揮した学びをとおして、学習内容がよく分かる実感につながるように、一律・一斉・一方向の学習から児童生徒が学び方を自己選択・自己決定できる学習への転換を図り、児童生徒が学び方を身に付け、それを生かす場面を充実させることが大切。

・グラフⅠ：自己肯定感と正答率



・表Ⅰ：教員からの承認と、自己肯定感や相談しやすさとの相関

	質問②
質問①	◎
質問③	小○／中◎

- 質問①：自分にはよいところがあると思う
 質問②：先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う
 質問③：困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか

・表Ⅱ：授業内容がわかるかと、自己調整力や省察力との相関

	質問⑫	質問⑬
質問⑤	○	○
質問⑪	○	○

※凡例(rは相関係数)

◎：正の相関が見られる。(0.4 \leq r \leq 0.7)

○：弱い正の相関が見られる。(0.2 \leq r \leq 0.4)

- 質問⑤：分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる
 質問⑪：授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思う
 質問⑫：国語の授業の内容はよく分かる
 質問⑬：算数(数学)の授業の内容はよく分かる

「学び方」に着目した分析・考察

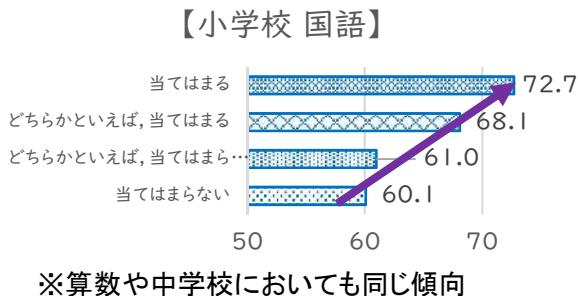
分析

- ・「個別最適な学び」や「協働的な学び」等の「学び方」の質問について、「できている」と肯定的に回答している児童生徒は、学力調査における正答率が高い傾向にある。(グラフⅡ, 表Ⅲ)
- ・授業におけるICT機器の使用機会が「ほぼ毎日」「週に3回以上」の児童生徒の学力調査の正答率は高く、「月に数回」「月1回未満」の児童生徒の正答率は低い傾向にある。(グラフⅢ)
- ・「主体的な学び」と「個別最適な学び」には、正の相関が見られる。(表Ⅳ)

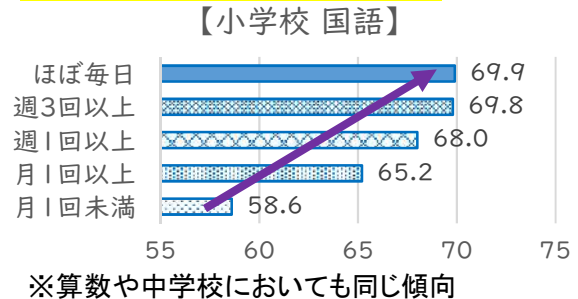
考察

- ・ICT活用については、正答率との関係は明らかになったが、ICT活用と「授業内容がよく分かる」等との相関が見られなかったことや、教師の認識以上に、児童生徒はICT機器を活用している実感をもていない現状があることから、今後、学習のねらいに即して、ICT機器を活用した学習を質・量ともに一層充実させる必要がある。
- ・主体的に学んでいると実感している児童生徒は学力調査の結果も高い傾向にある。また、自分にあった学習ができている実感と主体性の高まりには相関が認められることから、一律・一斉・一方向のみによる授業から脱却し、学習内容や方法等を児童生徒が自己選択・自己決定する場面、協働して学びを深める場面とのバランスを考慮した単元デザイン、授業実践の工夫が大切であり、今後一層「学習者主体の授業」づくりを進めていく必要がある。
- ・「確かな学力」の育成を図るためには、学校の授業改善に加え、家庭学習の充実が欠かせない。家庭学習は、教師が指示する課題のみに取り組む学習から脱却し、児童生徒が自分の学びを振り返り、自らの問いや必要性に基づいて、自ら計画を立て、自ら学ぶ家庭学習を進めることが大切である。

グラフⅡ：個別最適な学びと正答率



グラフⅢ：ICTの活用頻度と正答率



表Ⅲ：「当てはまる」と回答した児童生徒と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差(ポイント)

質問項目	小学校		中学校	
	国語	算数	国語	数学
質問⑦：授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。【主体的な学び】	18.5	21.9	22.1	26.7
質問⑧：授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた。【個別最適な学び】	12.6	12.3	12.1	15.7
質問⑨：学級の児童(生徒)との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている。【対話的な学び・協働的な学び】	15.3	14.1	14.7	16.3

表Ⅳ：「主体的な学び」と「個別最適な学び」との相関

	質問⑧
質問⑦	◎

質問⑦：授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。
 質問⑧：授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた。

報告書本体は[こちら](#)

